

次世代を担う子供達のまちづくり意識の把握と大人との意識差についての一考察（大宮駅東口都市再生プランを事例として）*

A study on grasp of the younger generation's consciousness as urban development (a case of the Omiya Station East Exit Area Redevelopment Plan) *

土屋 愛自**

By Aiji Tsuchiya**

1. はじめに

(1) 研究の目的と背景

右肩上がりであった人口のピークも間近となり、今後、社会資本の整備についても少子高齢化社会を前提とした施策を展開していく必要に迫られている。

一方、次世代を担うべく子供達の地域社会への接点や将来のまちづくりへの参画意欲の醸成という視点においては、子供を対象としたシンポジウムなども開催されてはいるが、未だ各学校の裁量に依存する部分が非常に高くなっており、地域的な格差も生じている。

また、公立中学校では「総合的学習」というプログラムの中で、地域社会への奉仕活動や社会体験、都市計画の仕組み等について取り組みが始められているが、小学校から高校、大学とステップアップしていく過程において、体系的な学習プログラムや実績評価の実施という面からも発展途上であると言わざるを得ない状況にある。

本研究では、このような背景のもと、子供達がどのような視点で将来のまちづくりをとらえているのか、また、成長していく段階でその意識がどのように変化しているのかという点について、まちづくりアンケートから世代間の意識を把握すると共に、定量的な解析を試みることにより、ジェネレーションギャップの要因とその差について分析し、今後の*まちづくり学習やまちづくりへの参加施策を考えるための基礎資料とすることを目的とした。

(2) 研究の方法

本研究は、大宮駅東口周辺地区約60haにおける将来のまちづくり構想「大宮駅東口都市再生プラン」の策定プロセスにおける「市民意向調査アンケート」に着目し、無作為抽出アンケートと、調査エリア内外の公立小学校（2校）、公立中学校（2校）、高校（公立1校、私立1校）、市内の大学（国立1校、私立2校：都市計画専攻学生）を対象としてアンケートを実施し、まちづくりへの意識・理解度等を比較するとともに、多変量解析手法である主成分分析・因子分析により定量的な世代間差を把握する。

2. 研究対象地区の概要

(1) 都市再生プランの概要

本研究の対象とした地区は、大宮駅前約2.4haの第1種市街地再開発事業が昭和58年の都市計画決定後事業化されず、「公共事業評価監視委員会」において、平成14年に再開発事業の中止が答申された地区を含む約60haの区域である。「大宮駅東口都市再生プラン」は、再開発の中止によるインフラ整備の遅延を防ぎ、将来のまちづくりの指針となることを目的として策定されたものであり、市民と行政のコラボレーションを実現し、役割分担を明確にするため、構想の策定段階から積極的に市民意向を把握した点に特徴がある。

*キーワード：子供達のまちづくり意識

**正員、さいたま市役所 都市局 都市整備部 整備企画課

(埼玉県さいたま市浦和区常磐6丁目4番4号)

TEL 048-829-1449、FAX 048-829-1976)



図 1 都市再生プラン区域

3. 子供達の意識把握

(1) アンケート調査の対象と質問内容

アンケートについては、平成14年7月1日～7月31日まで表1を対象に行ない、総標本数4333件の内、有効回答数2048件、47.3%の回収率となった。

ただし、学校については、直接学校を通じてアンケート協力のお願いをしたため、回収率は、約92%と非常に高い数字が得られた。

表 1 アンケート調査対象

対象	標本数	回答数	回収率%
市民抽出計	3473	1257	36.2
・60ha内	494	221	44.7
・旧大宮東	1792	664	37
・旧大宮西	592	190	32.1
・旧与野	297	102	34.3
・旧浦和	298	80	26.8
学校計	860	791	92
小学校(6年)			
・大宮	56	55	98.2
・桜木	50	47	94
中学校(2年)			
・大宮東	113	108	95.6
・桜木	117	105	89.7

高校(2年)			
・大宮	250	246	98.4
・大宮開成	210	209	99.5
大学(3年)			
・芝浦工大	80	68	85
・埼玉大	70	48	68.6
・日本大	20	16	80

アンケートの質問内容については、属性(性別、年齢、職業等)、大宮駅東口周辺地区のイメージ、都市再生プランの素案について、自由意見について質問を行なった。

なお、小学校については、回答が難しい部分と質問の意味が理解できない可能性があるため、小学生用の質問用紙を作成し、質問項目としては、将来のまちのイメージと現在のいいところ、悪いところ、普段利用している店舗や施設、利用する道、行動範囲、利用手段等について質問を行った。

表 2 アンケート質問概要

項目	内容
1. 属性	性別・年齢・職業・駅周辺の利用目的・交通手段・頻度・時間等
2. 大宮駅東口周辺のイメージ	良いと思うところ(9項目から選択) 悪いと思うところ(14項目から選択) 将来の街のイメージ(16項目から選択) 将来必要な施設等(10項目から選択)
3. 再生プランについて	再生プランの基本方針について 街の骨格となる道路のイメージについて 3つの拠点地区形成について 駅前周辺地区の交通ネットワーク等について

表2 アンケートについて、大宮駅東口周辺のイメージに対する世代別(中学生、高校生、大学生と一般市民)の意識特性について把握することを次項で試みた。

一般市民の有効回答者(1257名)の属性としては、男性50.7%、女性47.3%無回答2%であり、年齢構成としては、表3のとおりである。

表 3 一般市民回答者年齢構成

年代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
人数(人)	123	192	196	303	257	160	26

(2) 因子分析による世代間の意識差の把握

まちの認識、まちへの期待等について、各世代間で意識差は生じているのかという点を把握するため、大宮駅東口周辺地区における良いと思うところ、同地区の悪いと思うところ、将来のまちのイメージ、将来のまちに必要なと思われるもの、以上4項目について、因子分析 (Factor analysis) を用いて世代の意見の類似性を検討した。

表4及び図2によると、まちの良いところ及び将来まちに必要なものについては、学生グループと市民とで大きな差が見られた。まちの悪いところについては、年齢が上がるほど因子負荷量の数値が増加する傾向にある。将来イメージについては、中学を除き、年齢が高くなると数値が減少する傾向が見られた。

表 4 因子分析による世代間の類似性

	第一因子負荷量の得点順位 (高 低)				固有値	寄与率 %
	高校	大学	中学	市民		
良いところ	高校	大学	中学	市民	2.78	69.5
悪いところ	高校	市民	大学	中学	2.84	70.9
将来イメージ	高校	大学	中学	市民	2.77	69.3
将来必要なもの	大学	高校	中学	市民	3.49	87.4

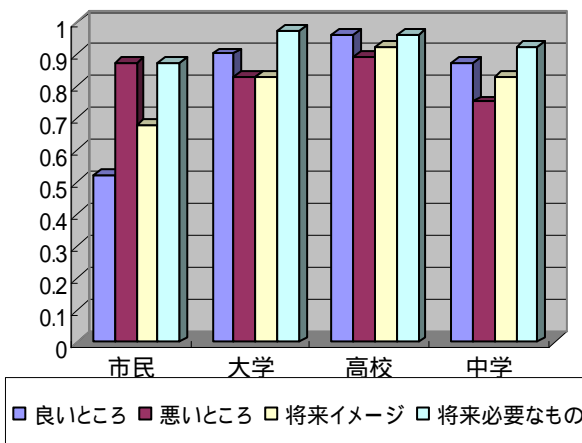


図 - 2 因子分析による第一因子負荷量

(3) 主成分分析による世代間の意識把握

因子分析により世代間の意識の類似性について考察したが、各世代でアンケートについて、どのような視点から選択肢を選んでいるのか、また、世代の特性を現す要因は何なのかを把握するため、主成分分析 (Principal component analysis) を行なった。

なお、使用したデータは、将来のまちのイメージについて問うたものを使用した。

表 5 学生 (中学生 ~ 大学生) を対象とした主成分分析結果

固有値表	固有値	寄与率	累積寄与率
主成分 1	293.316	76.68%	76.68%
主成分 2	89.22847	23.32%	100.00%

表 6 一般市民を対象とした主成分分析結果

固有値表	固有値	寄与率	累積寄与率
主成分 1	148.6205	74.39%	74.39%
主成分 2	51.15506	25.61%	100.00%

表5、6において、いずれも第1主成分で寄与率が70%を超えており、概ね第1主成分で説明することができる。

主成分得点 (図3、4) を比較すると学生と一般市民との将来イメージを選定する要因がまったく異なっていることが判る。

学生は、他世代交流、自転車利用、バリアフリー、様々な店、緑という項目がプラスベクトルを示しており、将来イメージを決定する要因として、コミュニティを重視している傾向が伺える。

マイナス因子については、文化・交通利便・景観等が高い数値を示しており、所謂ハード・視覚的な部分でのウエイトは低い。

一方、一般市民は、交通利便性向上、景観にすぐれた、様々な店、緑がキーワードとなっており、社会活動における利便性等が将来のまちの姿を考へるときに重視していることを表していることがわかった。

学生と一般市民においては、将来のまちに期待することを判断する場合に、学生がコミュニティの形

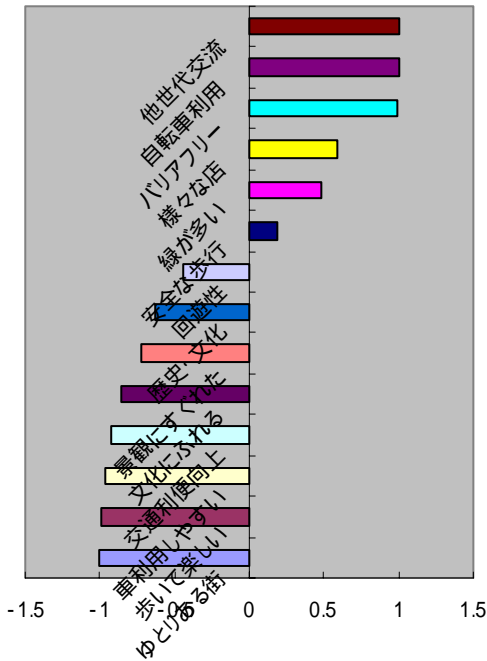


図 3 第1主成分得点 (学生)

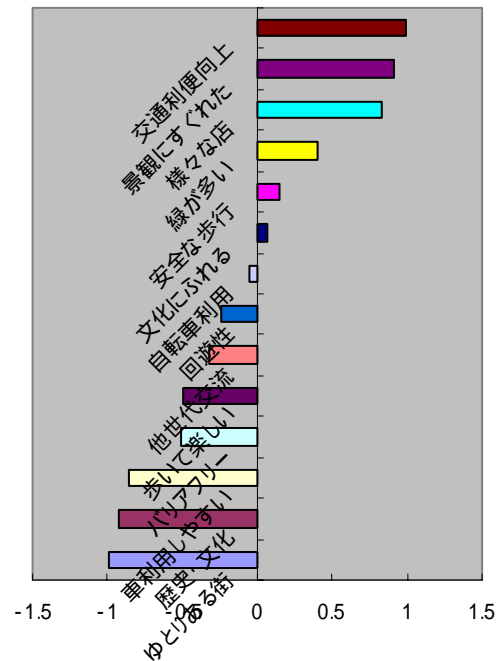


図 4 第1主成分得点 (一般)

成や自然環境を望み、年齢を重ねることで具体的な生活環境の向上を意識していくようになるということが言えよう。

4. まとめ

本研究において、大宮駅東口都市再生プランのアンケート調査に基づき、各世代間のまちづくりに対する意識の差とその要因を分析することを試み、以下の成果が得られた。

まちの現況のとらえ方について、因子分析により中学生から大学生までの学生グループと一般市民とは異なった傾向を示した。

将来のまちのイメージとしては、年齢が上がるほど因子負荷量が減少していく傾向が見られた。

小学生については、自然環境の保全や環境美化の面がまちづくりに重要と認識しており、交通環境や利便性等については、年齢上昇とともに重視する傾向が示された。

主成分分析により学生と社会人との意識要因を調べたところ、学生が地域コミュニティの形成を基本姿勢としているのに比べ、社会人は社会活動における利便性向上の視点からまちづくりをとらえていることがわかった。

5. 今後の課題等

本研究では、東口のエリアを限定した各階層別のまちづくりアンケート調査を基に、世代間の意識差とその要因を探ることを1つの目的とした。その結果、学生と一般市民とのまちづくりへの期待や問題意識の点では、差が生じていることが示された。しかしながら、大学生を都市計画を専攻している学生に絞っているため、一般の大学生の特性や感覚を把握しているとはいえない点、各年齢層で構成されている一般市民を一団として扱った点等が世代意識差を明確に表現できなかった理由となる。そのため、一般市民を年代別あるいは男女別・職業別等で比較考察していくことも必要である。そして、各世代の学生が今後どのようにまちづくり意識が変化していくのかという経年変化についても引き続き分析していく必要がある。

また、小学生や中学生の純粋な社会貢献といった感性・感覚を次世代へいかにして継続させていくのかという問題についても、今後の課題となる。

参考文献

- 1) 大宮駅東口都市再生プラン(素案)の市民等の意向調査 平成14年度 さいたま市